



今年は北国では大雪の被害が相次いでいます。福岡でも雪が積もりました。福岡を取り囲む山々が雪を頂いて、雪国にしているような景色でした。しかし、大寒も過ぎて日一日と春に向けて暖かくなっていくのでしょうか。路傍には春の野草(オオイヌノフグリ、ホトケノザ、ハハコグサなど)が咲き始めています。

雪の積もった1月8日に天拝山に登りましたが、雪を掻きわけながら地面に落ちている草の実などをついばんでいるソウシチョウの群れに出会いました。健気な姿に優しい気持ちになりました。

★ソウシチョウ(相思鳥) 2021年1月8日

筑紫野市天拝山石楠花谷にて撮影

■■■■■■■■ なかよし情報210122:50年ぶりに『資本論』に再会 ■■■■■■■■

私が大学に入学したのは今から50年前です。当時は東西冷戦の代理戦争としてベトナムで激しい戦争が行われていました。日本も日米安保条約の10年改定時期に当たっていて、戦争反対の学生運動が活発に行われていました。日米安保推進派と反戦派の対立は激しさを増していました。

そのような時にカール・マルクスの『資本論』は戦争という社会的な大矛盾を乗り越えるため＝全人幸福のための一つの理論として、世界中の人たちの活動を支えました。『資本論』はその後の社会主義国建国にも貢献しました。その後、1989年のベルリンの壁の崩壊が象徴する東西冷戦が終結し、社会主義国が次々と倒れて資本主義国となっていきました。その過程で『資本論』の存在も薄れていってしまいました。

そして今、地球規模での問題(気候変動、格差、パンデミック、日本はさらに原発事故処理)に直面して、どうにかしなければ人類や他生物の存続すら危ぶまれる状況の中で、再び『資本論』が世界的に見直されています。

私もこの大きな課題をどのように解決できるのだろうかと考えている中で、「人新世の『資本論』」(斎藤幸平著・集英社新書)という本に出会いました。学生時代の未消化の部分にヒットしたのかも知れません。しかも、著者は新進気鋭の若い研究者だということで早速手に取って読み始めると、一気に最後まで読んでしまいました。

カール・マルクスは、世界が抱えている大矛盾を解決するには資本主義(一握りの富者と大多数の貧者を生み出すシステム)を新しいシステムに変えなければならないというものでした。資本論(第1巻)を著した後にカール・マルクスは大きな思想的転換を遂げます。第2巻、第3巻はエンゲルスによって刊行されましたが、マルクスは第1巻後は生産現場などを細かく視察する中で、全人幸福に至るための理論を組み立てていったのです。

現在、その膨大な文献を世界中の研究者がネットワークを組み、これからの新世界を築くための社会変革理論として紹介し、実際に活動として展開しています。

この本を読んで、50年ぶりに『資本論』に再会しましたが、その『資本論』は50年前よりも比較にならないくらいに明るさに満ち、これからの世界を再構築できる可能性に満ちたものでした。それは、時代が変わっても通用する、彼の思想の普遍性を改めて証明しているように思えます。

もし時間があればお読みになってみてはどうでしょうか。明るい未来が見えてくるように思います。

【番組紹介】NHK・ETV「100分で名著」で放送中です。すでに4回分のうち3回分が放送されましたが、残り1回(最終回)が来週25日(月)午後10:25-10:50で放送されます。再放送は27日(水)午前5:30-5:55、または午後0:00-0:25です。著者の斎藤幸平氏が講師として登場してわかりやすく『資本論』を紹介して下さいますよ。